

## 3 博物館事業の記録

### (3)教育普及活動

科学館時代から続く教育普及活動は、各学芸員がそれぞれ関連する講座や講演会などを担当していた。しかし、学校や公民館からの派遣依頼等に柔軟に対応し、また広く県民に学校教育・社会教育及び生涯学習の中で博物館を利用し、郷土の歴史や自然、芸術に関する知識の教育普及活動を県内に浸透させるため、平成18年度に学芸課に「普及担当」が設置された。このことにより、講座開講数及び参加者等が倍増したほか、それまでの講座や講演会、ワークショップ等を再編成し、県民の多様なニーズに応じられるようにした。令和4年度には、「普及担当」の名称をより実態に合うように「学習支援担当」に変更し、鳥取県教育委員会の施策である「ふるさとキャリア教育」や生涯学習への支援を明確化し、学習者自らが博物館資料を使って主体的となって学んでいく体制へとシフトした。博物館は学校や公民館、ホームページに情報提供し、それぞれのニーズに合わせた学習支援を行っている。

各講座や講演会等の教育普及活動の詳細は各部門で詳述するが、50年間の活動の中では時代的背景などにより少しずつ転換してきたことがうかがえる。

出張展示の一環である「巡回展」は、県中西部から出張展示や学芸員の派遣などの要望が多かったため開館6年を経た昭和53年にスタートした。開始当初は年に1テーマ、県中西部を中心に各地の市町村と共催して初年度は3箇所巡回した。平成元年度の「空から見た郷土のすがた」は11市町で開催し、15,000人近くもの入場者を数えた。平成3年度以降は各分野が企画・開催するようになり、平成13年度には7つのテーマで開催し、平成14年度には美術分野で倉吉博物館・米子市美術館との共同展を初めて開催し、以後共同企画展がたびたび行われるようになった。

並行して、平成13年度から「移動博物館(出前展示)」の事業を開始した。これは博物館が学校や公民館等へ資料を貸し出すもので、巡回展とは主旨が異なる。平成20年度に巡回展の名称を自然・人文分野の「移動博物館」、美術分野の「移動美術館」に改称する一方、これまでの移動博物館を「出前展示」に改称し、名称と展示規模を明確にした。

講座では、科学館時代から続くものに、天体観望会(現・星をみる会)、見学会、採集会、史跡めぐり、民俗行事を訪ねる会などがある。県内各地で参加者とともに採集活動をしたり、史跡や民俗行事の見学をしたりといった活動のため、講座名称に地名等が付くことが多い。また、野鳥の声を聞く会(S44～56年)、秋の虫の声を聞く会(S48～56年)などは昭和56年度から鳥取自然保護の会が主催となった。このほか、「自然と歴史を訪ねる会」(~S58年)は博物館協会(現・鳥取県立博物館友の会)との共催で実施した。

上記はおもに一般向けの講座であるが、対象を子どもに絞った講座も実施しており、昭和49年から始めた「中学生講座」や昭和50年から始めた「小学生講座」がある。これらは親子連れを対象とした「親と子の博物館野外教室」(S51～58年)に次第に収斂していった。「博物館大山教室」(S56～58年)は大山青年の家との共催で、1泊2日の野外活動を含めた講座であった。また、小学生の子を持つ母親を対象にした自然・考古分野の講座「お母さんの博物館教室」(S56～58年度)もあった。美術部門においては、平成14年度から近隣に美術館・博物館相当施設がない学校を主な対象とした出張美術教室企画「アートスクールがやってくる」を開始した(後に「学校&地域でアート」と改称)。

昭和49年から「土曜講座」と総称して各分野交替で土曜日に講座を開催していたが、平成に入って週休2日制が導入されるなどの影響から見直しが行われ、名称からは外されることとなった。しかし、美術部門の各種普及講座を土曜日に開催することで、土曜日に博物館を訪れるとアートイベントが開催されていることを趣旨とした「毎週土曜はアートの日！」が平成20年度から始まった。

255名収容できる博物館講堂を利用した「映写会」(S47～56年度)は、当初年10回程度実施していたが一時期中断する。平成8年度に美術分野で「博物館映写会」として復活し、平成14年度に「博物館シアター」、平成20年度以降は「アートシアター」と改称して美術に関する映画や映像を上映している。このほか、講堂に設置したグランドピアノを用い、館主催のコンサート企画も昭和63年から平成2年頃にかけては実施していた。また、理科離れ対策として子ども達に先進的な科学技術を紹介する「サイエンスレクチャー」と題した講演を行い、計10回の実施で1,208人の参加があった(H25～29年度)。

このほか、教員に博物館を利用して身近に感じてもらうイベント「教員のための博物館の日」を平成26年から鳥取県教育センターとの連携研修講座として開催している。こうした連携講座は他にも、鳥取県埋蔵文化財センターとの共催である「こども考古学教室」(H16～18年度)や山陰歴史館・倉吉博物館との共催である古文書解読ボランティア(鳥取県史編さん室とも平成29年度まで共催)がある。さらに平成27年から提携している県民団体との協力活動の中で、鳥取県生物学会、鳥取地学会、鳥取地域史研究会などとの連携で講座・講演会を毎年実施している。

### ◎収蔵資料台帳のデジタル化

収蔵資料台帳は科学館時代から引き継いでいるが、その後も採集や寄贈、購入などで資料数は年々増加している。これに伴い、検索や記載内容の変更、一括登録など事務作業の量と効率化を図るため、平成9年にデジタル化の方針が打ち出され、データベース構築の計画が始まった。平成12年には事業化に取り組んで目録の入力作業などを開始し、平成13年度にはデータベースソフトと情報発信システムの開発を進めた。翌14年には館内でデータベースの運用を開始し、さらに翌15年にはホームページで一般公開した。平成18年には自然部門の資料約62,000点をデータベースに登録・完全移行し、平成19年には人文部門の「祭り・行事」データを追加し、目録データのほか、動画の視聴も可能にした。

データベースシステムは、平成30年から鳥取県立図書館主導の「総合的なデジタル化計画」と共同利用することとなり、県立公文書館・県埋蔵文化財センターも合わせた4館合同のデジタルアーカイブシステムが事業化された。当館単体の「収蔵資料データベース」は令和2年10月に公開停止となり、令和3年3月に新システム「とっとりデジタルコレクション」が公開された。この新システムでは4館の収蔵資料の検索・閲覧ができるほか、国のデジタルアーカイブ「ジャパンサーチ」や国立国会図書館、国立公文書館のデジタルアーカイブとも連携している。

### ◎ボランティア活動

当館のボランティア活動は平成16年度から本格化した。現在も存続しているものとして、鳥取藩政資料の解読を進める「古文書解読ボランティア」、企画展のPRのためポスターを店舗や事務所、自宅などの壁面または窓等に掲示する「ポスター貼ります隊」がある。

ボランティア活動を開始した初期の平成16、17年度には、「こども活動支援」として、夏の企画展における展示案内や常設展示室でのボランティアガイドや、平成18～20年度の美術部門の企画展において、作品制作やイベント運営、ワークショップの補助などのボランティアを募集した。

## ■自然部門の活動

昭和47年10月1日に開館した当館の教育普及活動は、前身である鳥取県立科学館(昭和24～29年)、鳥取県立科学博物館(昭和29～47年)からの体系を引き継ぎながら続けられている。

科学館・科学博物館時代から現在まで途切れず毎年開催されているのが「標本を調べる会」「標本の名前を調べる会」などと呼ばれる標本の同定会である。標本を収蔵する自然史系博物館においては大切な教育普及事業である。科学館・科学博物館時代には館内に会場がないため鳥取市西町にあった鳥取市児童会館で開催し、館職員と小・中学校の教員が講師を務めていた。当館が開館して初めての夏となる昭和48年夏からは館内2階会議室を会場に行われ、現在は当館職員のみで開催している。50年間で4,838人の参加があった。

その他、科学館・科学博物館の流れを組んで現在まで開催されている教育普及事業には次のようなものがある。地学系の野外観察会では、「化石採集会」「地質見学会」「人形峠鉱山見学会」「川原の石をしらべよう!」などがあり、50年間で46回、1,228人の参加があった。野鳥に関する講座では、「野鳥の声を聞く会」が昭和48年から平成16年の期間、鳥取市樗谿や久松山を会場に行われたが、平成22年からは対象と目的を変えて「はじめてのバードウォッチング」として鳥取市湖山池でカモ類等の観察を行っている。野鳥の講座には50年間で1,992人の参加があった。「きのこを調べる会」は科学館・科学博物館時代には樗谿や久松山で開催されていた。当館開館後も初期は同様に開催されてきたが、昭和58年からは県内の東中西部のフィールドを巡回して実施され、平成18年からは鳥取県立大山自然歴史館と共催で、大山町大山寺地区をフィールドに行っている。これまでに43回開催され、2,202人の参加があった。

科学館時代の天文を含む理工学部門の展示は当館開館とともに廃止されたが、その後も幅広く本県の科学教育を担っていきこうと、理工系の普及講座も引き続き行われている。そのうち天体観望会は開館初年度の第1回の講座として昭和47年12月9日に行われ60名の参加があったが、その後も途切れることなく現在まで行われており、令和元年度までの参加者は7,358人にのぼる。



標本の名前を調べる会(S58年)



野鳥の声を聞く会(S60年)



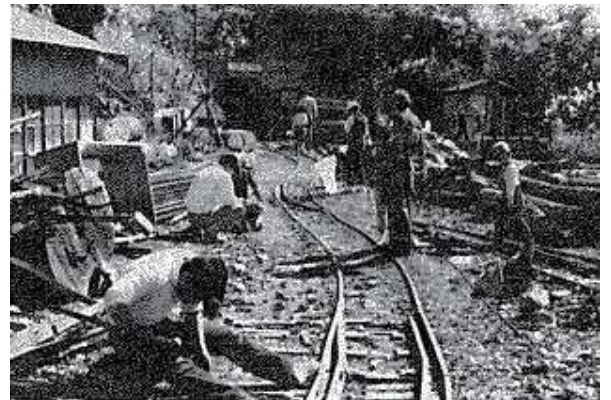
きのこを調べる会(H29年)

講演会の第1回は、昭和48年9月9日の「地震の話」であり、以降、多くの講演会が展覧会や調査研究と関連して実施されてきた。

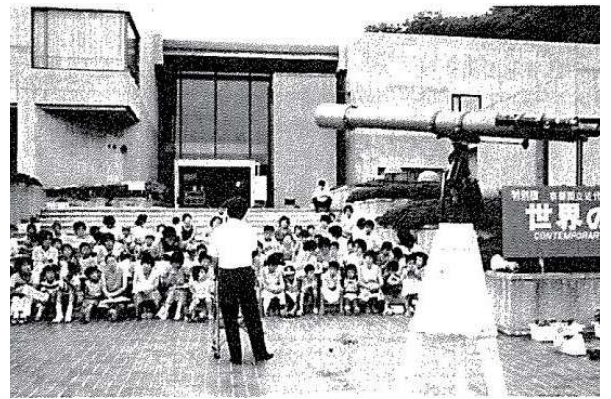
平成27年からはじまった新しい取り組みとして、鳥取県立博物館県民協力等実施要綱で定められた団体との講演会や観察会、保全活動などがある。自然分野では現在、4団体(鳥取地学会、鳥取県生物学会、自然観察指導員鳥取連絡会、いわみガイドクラブ)が登録され、当館との共催事業などを行っている。

### ◎アウトリーチ活動

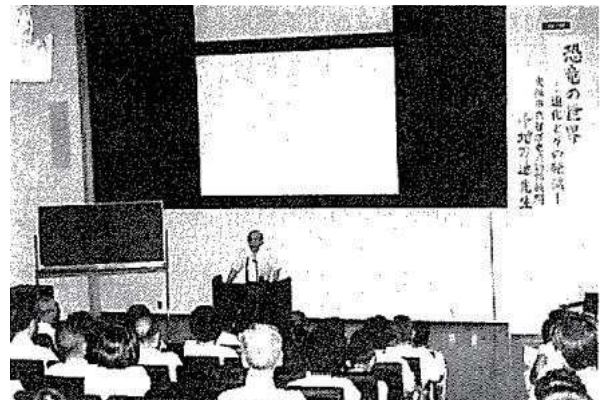
館外の施設等に移動して行う展示は、科学博物館時代の昭和29年に1トン積みのオート三輪が購入されたことで本格的にスタートした。博物館の展示を県内各地に届ける移動展示は形を変えながら現在も継承されている。昭和54年～平成18年は『巡回展』として地域の教育委員会と共催で実施された。「地球の歴史－化石の世界－」や「山陰海岸の生物展」などのテーマで、延べ58会場で行われた。平成13年からは、学校や公民館などの空き教室などに合わせて、「とっりの身近な野鳥」「食卓の魚」などテーマを絞った展示を行う『移動博物館』を実施し、これまで延べ110会場で行われている。平成30年からは、テーマを定めて(現在は「レッドデータブックとっりの生きもの」「鳥取県の化石」)、前年度末に学校、幼稚園、保育所などに希望を募ってミニ展示を行う『出前展示「博物館がやってくる」』を実施し、これまで延べ11会場で行われている。学芸員や専門員を講師として派遣する『学芸員派遣』は、平成30年度から記録が残っており、令和3年度末までに公民館での講演や学校の授業、ジオパークのリーダー育成など179回を数えている。



化石採集会日南町多里鉦山(S51年)



夏の星座観望会(S53年)



講演会「恐竜の世界」講師：大阪市自然史博物館顧問 千地万造氏(S62年)



移動博物館「レッドデータブックとっり」青谷中学校(R3年)

## ■人文部門の活動

人文担当の教育普及活動は、基本的に昭和47年10月1日に開館した当館になって開始されたものである。

特別展・企画展・催物展・巡回展における団体入館者等への向けての解説要望には随時応えている。講演会については、毎年2回程度行っている。時には、特別展(企画展)の内容に関わるものをその会期中に行っている。平成の後期までは、県内講師を中心とした郷土史講座も行っていた。また、職員が館蔵資料の調査による新知見を発表する学芸員講座(旧「人文講座」)は、現在も継続して行っている。

「史跡めぐり」、「民俗行事を訪ねる会」などの名称で実施された見学会は、平成10年頃まで「歴史と民俗を訪ねる会」として続いたものである。かつては旧「鳥取県博物館協会」(現在の「鳥取県立博物館友の会」)との共催で、バスを仕立てて県外へ出かける研修旅行もあった。

平成時代になると、全国の博物館で見学会や講演・講座といった座学形式のもの以外に参加体験型の講座が求められた。そこで当館でも「お金をつくろう!」「弓矢をつくろう!」「土器を作ろう!」(以上、考古学講座)、「巻物を作ろう!」「古戦場・山城・荘園を歩く」「鳥取城探検隊」「鳥取城下町ウォーク」「伯耆往来を歩く」(以上、歴史講座)、「たこを作ってあげよう!」「わら草履を編もう!」「しめ飾りを作ろう!」(以上、民俗講座)などを企画・催行している。

その他、「鳥取民話研究会」や「とっとり民話を語る会」の会員を講師(語り部)として、歴史・民俗展示室内復元民家コーナーの囲炉裏端で開催する「鳥取県の民話を聞く会」を平成10年頃から始め、現在も好評を得ている。

平成27年からはじまった新しい取り組みとして、鳥取県立博物館県民協力等実施要綱で定められた団体との講演会や観察会、保全活動などがある。人文分野では現在、4団体(鳥取民俗懇話会、鳥取地域史研究会、鳥取歴史振興会、いわみガイドクラブ)が登録され、当館との共催事業などを行っている。このうち、鳥取地域史研究会は、当館共催で鳥取県の歴史事象に関わるテーマの月例会や公開講座を会議室・講堂で行っている。



展示解説「くらしを支える匠の世界」(昭和63年)



展示解説 巡回展「空から見た郷土のすがた」



歴史と民俗を訪ねる会(平成8年)



しめ飾りを作ろう!



弓矢を作ろう!



お金を作ろう!



伯耆往来を歩く



巡回展「昔の道具とくらし」



特別講演会

### ◎アウトリーチ活動

自然分野と同様に、博物館の展示を県内各地に届ける移動展示は形を変えながら現在も継承されている。昭和54年～平成18年は『巡回展』として地域の教育委員会と共催で実施した。「鳥取県年中行事」や「昔の道具とくらし」などのテーマ、あるいは鳥取県郷土視覚定点資料収集事業の成果である「定点写真」を県内各市町村の公民館等の会場で行った。平成13年からは、学校や公民館などの空き教室などに合わせて、「鳥取県の狛犬」、「祭り・行事」「広告・刷り物」などのテーマを絞った展示を行う『移動博物館』を実施した。学芸員や専門員を講師として派遣する『学芸員派遣』は、郷土史の研究団体や公民館での講座、学校の授業、などに活用されている。



郷土史講座



人文講座



たこを作ってあげよう！



鳥取県の民話を聞く会

## ■美術部門の活動

美術部門での初めての教育普及活動は、昭和47年10月1日の開館から約2か月後となる11月26日の展示解説だった。「鳥取県の絵画」についてスライドを使用して説明したもので当時の美術係長が講師を務めた。翌年の年報には「当館は開館以来日が浅いために今後に多くの課題を抱えている。とりわけ博物館が、その日常活動において学校の児童・生徒をはじめ一般県民に、学習の場として又鑑賞の場として十分活用されるようにしなければならないと思う」と記されている。この頃のモットーは「博物館はみんなの広場」。県民に親しまれる館となるべく、県内外の美術館関係者や作家を招いての講演会や展示解説、映写会等は次第に回数を増していった。

開館当初から、児童・生徒に活用される館であること、そのために館内外での教育普及活動を充実させることを責務としていたが、美術部門の講座で初めて「子ども」について言及したのは、開館から10年を経た昭和58年だった。講師として鳥取大学教育学部で美術科教育を担当していた浜本昌宏助教授を招き「子どもの発達と表現」と題して講演会が開催された。昭和62年には、ピアノの贈呈式に際した「ミュージアム・コンサート」が開催され、翌昭和63年には、版画家の一圓達夫と野崎信次郎を講師に「木版多色・刷りの実演」が行われている。音楽や実演等活動の幅が広がっていく兆しがある。

美術部門の教育普及活動に一つの転機が訪れたのは、開館から27年経った平成10年だった。当時の担当者はそれまでの美術部門の教育普及を「見る、聞く」という傾向が強く、どちらかと言えば大人を対象とした内容であったと振り返っている。そこで、鳥取大学教育学部美術科教育担当の喜久山悟助教授らとともに「つくる、触れる」ことによって、子どもたちの造形思考と美術に対する興味関心の高揚を目指す、参加・体験型のワークショップ「世界に一つしかないぼくのわたしの灯り」を企画した。子ども(親子)を対象とした初めての教育普及事業である。対象は小学校3、4年生。流木や石などの自然素材や地元特産の和紙などを用いて思い思いに作られた灯りは、館内のエントランスホールに点灯・展示され、約450名の来館者の目を楽しませた。実施後の振り返りにある「学校教育では取り組めない博物館ならではの活動を企画する」という考え方は、後のワークショップへ引き継がれていく。博物館の人的資源ともいえるアーティストを招いて行うワークショップ「つくりあそびズム！」もその一つだ。平成15年のVol.1では、「線をさがして針金で彫刻化！」と題し、彫刻家・徳持耕一郎による子どもたちを対象としたワークショップを開催した。平成16年のVol.2「フレスコ画で描く子ども時代」では、制作と展示を「子どもがするように新鮮に見つめなおす」ことをコンセプトに、画家・有田巧を招いて大人向けワークショップが開催された。



ワークショップ「世界に一つしかないぼくのわたしの灯り」



毎週土曜はアートの日！ワークショップ「泥でアート」

この頃から館外での教育普及事業も、子ども・学校へとその軸足を移している。平成14年から16年には、コレクションを持ち込んで鑑賞授業を行う出張美術教室「アートスクールがやってくる」を実施した。より多くの子どもたちが本物に触れる機会を得られるよう遠距離の学校を中心に、県内小・中学校、高等学校、特別支援学校等、3年間でのべ36校に出かけている。平成16年には、レンタルグッズ「アートカルタ」を企画制作、その後「アートパズル」、「アートフィギュア」も作られ、コレクションを活用した鑑賞教育プログラムにも力を入れた。平成17年以降、出張美術教室の内容は、鑑賞講座、アートカルタを活用した講義、アーティストと学芸員の連携講座等ヴァリエーションを増し、出張先として公民館などの生涯教育施設も加わりさらなる充実が図られていく。中でも、アーティストと学芸員が様々な場所へ出かける取り組みは、教育普及事

業「アーティストとつくりろ！」へと発展し、児童生徒を対象としたプログラムの一つとして現在まで続いている。

一方、館内の活動としては、平成20年に「毎週土曜はアートの日！」がスタートする。美術部門の普及プログラムを土曜日に集め、「見る、聞く、つくる、触れる」のすべての体験が含まれるようジャンルを整理し直したものだ。前述のワークショップ「つくりあそびズム！」は、県内外で活躍中のアーティストを招いて開催する「スペシャルワークショップ」として位置づけられた。子どもから大人まで一緒に、あるいは対象を限定して、様々なアートとの出会いの場を年間50回余り提供するこの取り組みは、令和4年まで15年間続くこととなる。平成30年には、活動に参加するだけでなく、「参画する」機会の創出を目的として「ワークショップつくり隊」を公募・結成した。企画立案の過程での試行錯誤とコミュニケーションを大切にすこのボランティア活動は、新型コロナ感染拡大の状況下での難しさを抱えながらも継続中である。

教育普及を目的とした展覧会が初めて開催されたのは、平成18年の夏休み期間だった。美術常設展示の一環として企画されたもので、展覧会名は「子どもたちのためのアートクルーズ」。探検家のキャラクター「コロロン」が子どもたちを絵画の世界の冒険へと誘うもので、平易な言葉遣いやクイズを用いて子どもたちとアートの距離を縮めることを試みている。以降様々なかたちで、教育普及の視点でのコレクション展示は展開する。平成27年は、高校生キュレータープロジェクトを実施。公募によりキュレーターとなった高校生が、展覧会テーマの選定から展示計画、会期中のギャラリートークまでを行う「わたしどなかお？」展を開催した。平成29年には、現代美術作家のクワクポリョウタによるインスタレーション、平成30年には、日本画家の内田あぐりをゲストキュレーターとして招き、自作と当館コレクションのコラボレーション展示及びワークショップを行った。令和元年以降は、これらの展覧会の枠組みをコレクション展から切り離し、「美術をめぐる場をつくる」と題してシリーズ化している。子どもたちをはじめとする来館者に、より多様な美術との出会いの場を提供するためだ。令和元年度のシリーズⅠ「アートとの遭遇」展では、舞踏家集団「北斗座」の公演、武蔵野美術大学学生によるライブ・ペインティングと公開制作を行った。会場内に設けた県民参画ブースのワークショップ参加者は600名超を数えた。令和2年度のシリーズⅡでは、自然分野の企画展「変形菌」展と同時期開催だったため、菌類を用いたオブジェとインスタレーションを制作する高田光治の作品を展示した。令和3年度のシリーズⅢでは、瀧澤潔のインスタレーションにより展示室に400個の光源が揺れる光の空間が現れた。令和4年度シリーズⅣでは、サウンドアーティストの鈴木昭男とダンサー／アーティストの宮北裕美が新作インスタレーションを発表、会期中には、ライブ・パフォーマンスなどが行われた。このシリーズでは、来館者が展示に能動的に関わる仕掛けづくりを作家と議論を重ねながら実施してきた。

こうして続けられてきた美術部門の普及活動は今、新たな転機を迎えている。2年後に開館する県立美術館が「アートを通じた学び」の拠点としての美術ラーニングセンター的機能を担うためだ。県立博物館での50年の積み上げのうえに、さらなる視点を加えていく必要がある。平成29年度以降、県内小学生をバス招待する「ミュージアム・スタート・バス(仮)」の試

行、鑑賞をサポートする「対話型鑑賞のファシリテーター」の養成、学校や公民館等で作品を展示し鑑賞する「コレクション宅配便」の実施、さらなる美術ファンをつくる「アートの種まきプロジェクト」、障がいのある方と健常者がともに楽しむ鑑賞プログラムの開発等々、個別のニーズに応じて美術館を楽しみ、学べるようなプログラムの開発、試行、検証を続けている。そして、開館後も続けていくこととなる。美術館の中で、いわば実験室のように「アートを通じた学び」を研究するこの拠点は、令和4年に「アート・ラーニング・ラボラトリー(A.L.L.）」と名付けられた。



「高田光治 森からの贈りもの」会場風景



大学生のファシリテーションによる対話型鑑賞の様子